「白雪姫」

さて、白雪姫は、大きな森の中で、ひとりっきりになってしまいました。白雪姫はかけだしました。とがった石をこえ、いばらをふんで走りに走りました。やがて、あたりが暗くなったころ、小さな小屋が見えたので、そこに入ってやすもうと思いました。

小屋に入ってみると、そこにあるものはみんな小さく、かわいらしいものばかりでした。テーブルには白いテーブルクロスがかかっていて、その上には小さなお皿が七枚ならんでいました。どのお皿にもスプーンと、ナイフとフォークがついていました。グラスも七つありました。壁ぎわにはベッドが七つならんでいて、雪のように白いベッドカバーがかかっていました。

『語るためのグリム童話3』小澤俊夫監訳／小峰書店

走って逃げる白雪姫は、七人の小人の家にぴたりと行き着きます。迷ってしまってどこへも行きつけなかったら、このお話は成り立ちませんね。

「お月お星」

ある日のこと、父親は、お月とお星のいる家の門口にたって、かねをたたきました。

「お月お星のあるならばー、
どうしてこのかねたたきましょう。
カーン、カーン」

これをきいたおかみさんが、

「おや、六部が来たようだ。だれか行ってみてごらん」といいました。お月とお昼が外をのぞいてみると、そこにいたのは父親でした。

『日本の昔話2』小澤俊夫再話／福音館書店

六部になって、祈りながら諸国を旅する父親は、たまたま娘たちのいる家の前で祈ります。そこに娘がいることを父親は知らなかったし、娘たちも、父親が六部になってやってくると思いもしませんでした。こんな偶然は、現実ではありえません。

次へ

「馬方やまんば」

馬方は、そのあいだに木からおりて、むちゅうでやぶをこいで逃げていきました。すると、一軒家がありました。

「こいつは、いいかくれ家だ」

馬方は、いそいでそこへ逃げこみました。天井の梁へのぼり、ほっとひと息ついていると、ずぶぬれのやまんばが、

「寒い、寒い」

といって、はいってきました。

『日本の昔話５』小澤俊夫再話／福音館書店

馬方は、山姥から逃げますが、行き着いた一軒家が、まさに山姥の家でした。

「三枚のおふだ」

ところが、この小僧は、たいへんななまけものでした。枝を一本切ってはひとやすみ、二本切ってはひとやすみしているものだから三本めを切ったら、もう日がくれてしまいました。

「さあ、たいへんだ。いまからじゃ、とてもお寺へもどれそうにない。どこか泊まるところはないかな」

小僧がそう思ってあたりをみまわすと、ずうっとむこうに、ちかん、ちかんと明かりがみえました。小僧は、

「あそこへ行って、泊めてもらおう」と、明かりをたよりに、たずねていきました。

「こんばんは、こんばんは。お寺の小僧です。今晩ひと晩、泊めてください」

小僧が大声でたのむと、中から、

「はいよ、戸をあけろ」と、返事がしました。小僧が戸をあけてみると、口が耳までさけた、髪の毛のまっ白な鬼ばさが、麻糸をつむいでいました。

『日本の昔話５」小澤俊夫再話／福音館書店

小僧が泊まるところがないかとさがすと、むこうに明かりが見えましたた。状況の一致です。しかも、行ってみると、その家は山姥の家でした。和尚さまが、山姥が出るかもしれないといっていた、その山姥です。ぴたりとやまんぼの家に行き着く、場所の一致です。